



これでいいのか博物館

地域市民共有の財産を護り、未来へと継承していくための公的施設。博物館および学芸員は、日々、重責を背に業務に取り組んでいます。にも関わらず、この冷遇ぶりは……。全国で見聞きした現状に、私は憤りを覚えました。

博物館の情報システム開発を専門に扱う当社は、日本中の大小さまざまな館を訪れます。私自身、この4年間で数百館を訪れていますが、行く先々で、何かと考えさせられる事例に出くわします。たとえば、こんな感じです。

付箋紙、もう限界です……

開館時に I.B.MUSEUM が導入されたところまでは良かったのですが、1 名しかいない学芸員が併設された図書館のカウンター業務に忙殺され、データ登録作業どころか資料実物を整理する暇さえありません。PC に向かう時間が取れないため、付箋紙に走り書きしたメモを紙の台帳に貼り付けるのが精一杯。台帳は、開館前からあった古いもので、ファイルがパンパンに膨れ上がっています。

時間なし、予算なし、打つ手なし。相談する人は、電話で教えてくれる県立館に務める知人だけ。貴重な古文書を多数所蔵しているというのに……。粘着力がなくなって今にも剥がれそうな付箋紙の山が、実情を物語ります。

1 日に何往復させる気ですか？

これは当社社員からの報告です。パソコンがわずか 1 台しかない館のお話。蔵書を閲覧する来館者が多いため、カウンターで問い合わせを受けるのですが、パソコンは学芸員室内に設置されており、その場で返答することができません。質問内容をメモしてカウンター奥の学芸員室に戻り、エクセルで作ったリストで Ctrl+F キーで検索し、そこでまたメモを取って来館者を待たせているカウンターへ。非効率の極みと言えるでしょう。

一度や二度ならともかく、それが一日に何度も何度も繰り返されて、そのたびに往復を強いられれば、「カウンターにもパソコンを置くべきではないか」という声が挙がって当然。それでも、来館者さえ疑問に思うこのスタイルが、今日も続いているのです。

Win95 なんて、もうアキバにしかない……

90 年代終わりごろに I.B.MUSEUM を導入した館の例。地道に入力を進め、数万点分の登録が完了していますが、購入から 10 年も経っている機器類は、とっくにサポート期間が切れています。では、もしも故障したらどうなるか？ インターネットのオークションで個人売買するわけにもいかないため、交換用パーツを秋葉原の中古ショップで探すしかありません。Windows95 の時代の部品なんて、もう量販店には並んでいないのですから。

毎年、予算を求めてはみるものの、まともに検討さえされずに却下されるのが恒例行事。そんな中で、最近、とうとうサーバが天寿を全うしました。バックアップデータをダウンロードできる PC すら用意できない状況では、10 年かけて一生懸命に蓄積したデータが水泡に帰す危機が訪れても、どうすることもできません……。



博物館は公共機関であり、国や地方の文化資産を預かる宝庫。にも関わらず、こうした状況に苦しむ館は、数え上げればキリがないのが実情です。同じ「箱モノ」でも、湯水のようにカネを使う分野もあると言うのに、なぜここまで予算が付かないのでしょうか？

多くの学芸員は懸命に頑張っておられますが、それにも限界があります。IT 社会がますます進む現在においては、館が役割を果たすには管理システムの導入が必須であることは言うまでもありませんが、それ以上に、本来は文化を支えていることが広く知られるべき彼らの苦境を、もはや黙って見ているわけにはいきません。私たちシステム業者は、彼らが流している汗の量を知っているのですから。

予算が付かない？ ならば、年にパソコン 1 台分程度でシステムのすべてが賄える金額まで落とそう。それが、MAPPS の始まりとなりました。